



ついのべ

2012まとめ

みずきあかね

## 部屋の隅に霞のような.....

---

部屋の片隅に霞のような奴がいる。  
放っておいたらそのうち喋るようになった。  
奴の独り言は聞き覚えのある声で、励ましの言葉を呟いてくれた。  
毎日ラジオのように聞き流していたら、少し前向きになれた気がする。  
聞き覚えのある声の主に電話をした。  
「母さん？　ありがとうな」

部屋の片隅に霞のような物が見える。  
目を懲らしても見えない。  
怖い。  
あれが何かだったら？  
幽霊とか妖怪だったら恐すぎる。  
でも見なくてはいけないような気がした。  
強迫観念に負けて電気を付けて見た。  
とたん動悸と全身に冷や汗が。  
それはやりかけの美術の課題。提出は明日の朝。

部屋の片隅に霞のような奴がいる。  
不思議と恐くない。  
そのうち退屈しのぎにそいつに話しかけるようになった。  
奴は俺の話を聞いているのか、たまに揺らめいたりする。  
ある日、悩みを打ち明けてみた。  
「好きな奴が出来たんだ」  
すると奴は小さくなって消えた。  
涙のような滴を残して。

部屋の隅に霞のような物が見える。  
妖や幽霊ならお祓いをするべきだが頼む金はない。

せめて清めの塩を盛ってみよう。

しかし、塩分を控えめな私の手元には「やさ塩」しかない。

まあこれも塩だからと盛ってみた。

次の日、霞は半分の大きさに。どうやら効き目は50%だったらしい。

「部屋の隅に霞のようなのがいるの。

嫌な気がしないから放って置いたけど、あれがいるようになってから虫がいなくなったんだ。

Gとか蠅とか、虫が入ってきていやだなあと思っても、知らない間にいなくなるの。

便利よ。今は私よりも大きくて……」

そこで彼女の電話が途切れた。

部屋の隅に霞のような奴がいる。

妖か何かしらんが放っておいた。

ある日、机の向こうに消しゴムを落としたが、翌朝不思議と机の上に戻っていた。

タンスの隙間にわざと落とした10点のテストや記憶の彼方の元カノの手紙と一緒に。

「お前か？」

部屋の隅の奴は、まだ居座ったまま。

部屋の隅に霞のような物がいた。

それは「これからあなたによいこととわるいことがおこりますよ」等と言う。

にわかに恐くなって徹底的に掃除をして換気をするうちに奴はいなくなった。

数日後、奴の予言は不思議と現実と成った。

お腹の中に新しい命。独り身の自由は終わった。

部屋の隅に霞のような奴がいる。

妖か何かしらんが嫌な気はしないから放っておくことにした。

一週間後。

帰宅して「ただいま」と言うと、そいつは「幸せか？」と聞いてきた。

少し考えて「まあね」と言うと奴は「そうか」と笑って消えた。

その声は不思議と亡くなった祖父に似ていた。



<泣くな！>

「光あるところに影があるのです」

彼が指を差す方向にあの人はいた。

自信に満ちた彼と違い、あの人は自信なさげに影を纏う。

双子で生まれてここまで違う性格になるのか。でも

「あの人の光はもうあんたじゃない」

私はあの手に手を差し出す。

「私があなたの光になる。泣くな！」

<光>

私は渴いている。

冷蔵庫を開けて冷えたグラスに氷と水を満たす。

水をガリガリとかみ砕きグラスの水を飲み干しても、私は渴いたままだ。

カーテンが引かれた部屋は薄暗く、空調が効いていてひんやりとした空気が満たしている。

ああ、渴いてる。

わかってる。

私は光に飢えている。

<お盆>

影が列を成し歩いてくる。

戦争で死んだ人たちも、病気で死んだ人たちも、災害で死んだ人たちも、意気揚々と。

彼らは帰れることを喜びながら歩いてくる。

だから私たちは、今ある生を喜び、過去の生を尊びつつ、彼らを迎えるのだ。

お帰りなさい。

私たちは幸せですからご安心を。と。

<ペンギン親子>

冷たい国から流された氷の上でお母ちゃんと二人。  
拾った傘も役立たずで氷も溶けてきたけどお母ちゃんは「大丈夫」って笑うので、  
「氷がなくなったら泳げばいいよね」  
ってぼくも笑った。  
お母ちゃんはビックリした顔してから  
「そうだね」  
って抱きしめてくれた。  
大好きお母ちゃん。（ペンギンフェスタに寄稿されたイラストによせて）

### <シチュー>

私の醜悪な秘密を知った者は驚くだろう。  
私はしみ出た血が熱で凝固していく様が好きだ。  
ぐずぐずと崩れる肉が好きだ。  
それらの断末魔を想像するのが好きだ。  
そしてこれらの生は、私達の中で完結する。  
「さあどうぞ」  
彼の前に出す夕食のビーフシチュー。  
今日も美味しくできました。

### <死神>

男のキスを受けた娘は、息ができなくなった。  
娘は苦しげに胸元をかきむしりながら絶命した。  
醜い男は闇夜のようなマントから箱を取り出し、取り出したばかりの娘の魂をピンでとめた。  
「ああなんて美しさだ。手に入れて良かった」  
死神は箱にずらりと並ぶ魂達をうっとり眺める。

### <喧嘩>

喧嘩する夢を見た。  
耳が聞き取りづらく自分の事をわかってもらえないと身振り手振りで話す人に、私はちゃんとわかってると伝えようとした。  
結局お互い本当に言いたいことが判らず別れ際も笑顔になることはなかった。  
目が覚めた。  
その人がもう鬼籍の人だと気がついて下唇を噛んだ。

<桃太郎>

昔々桃太郎は金銀財宝を持って帰ってきたところで娘の寝息が聞こえた。  
一般教養だけこんな話嫌だわ。  
絵本を閉じて娘の頭に生えかけた角にキスする。  
このお話のとおりいきなり殺戮と強奪する奴が来たのは事実。  
怖いなあ、ニンゲンは。  
あんな惨い話を綺麗な絵本にしちゃうから。

<鬼>

鬼がいる。  
ついてくる。  
音もなく。  
後ろにいる。  
投げる豆はない。  
鬮の頭も柵の葉もない。  
怖い顔をして私を睨んでいる。  
憎んで嘆いて蔑みながら鬼がついてくる。  
ふり向いた。  
鬼がいた。  
恐ろしくて目をそらし前を向いた。  
足よ歩け。振り切れ！  
恐ろしい。  
その姿は私。

<猫>

そっと髪を撫でている気配にうっとりとし身をゆだねていた。  
きっと彼だろう。  
目を開けたら笑顔がそこにあるはず。  
でも眠すぎてまぶたが開かない。  
一房持ち上げられたのがぱたんと落ちる。  
また一房。  
その時「フーっ！」と猫の唸る声と共に気配が消えた。  
そこで気がつく。

彼って誰？

<赤い月>

奴は赤い月を見上げ背中を向けたまま何か恐ろしいことを言う。

でも夢は必ずそこで途切れるのだ。

一体何なんだと思って迎えた皆既月食の夜、奴は赤い月を見上げて背中を向けたまま言う。

「俺、お前のことが好きなんだ」

予知夢だったのか。

恐ろしさに身が震える。

男だろお前も。



## 前向きになりたい話

---

### <透明な傘>

天から幸いが降ってくるとは限らないので、今日は傘をさして行こう。

不幸が降ってきてびっくりしないように。

でも本当に小さな幸いを見逃してしまうかもしれないので、透明な傘に替えた。

突然雲がわき上がり嵐が起こったけど、きらきら光る雨粒と小さな虹を見逃すことはなかった。

### <落としたもの>

勉強中に消しゴムを落とした。

机の影で見えないから椅子を降りてひざついて探した。

「消しゴムどこだ〜？」

ここかなと机の下に手を入れると紙の感触。

取り出してみれば受験ガンバレの一言と懐かしいあの子のイラスト。

いつのまにか落としてたんだ。

ごめん。がんばる。

### <現実逃避>

僕が化石になったら、なんて歌詞を思い浮かべながら君と電車に乗る。

周りは今日のことでめいっぱいな人でいっぱい。

「僕が冷凍睡眠で百年後目が覚めても、僕は僕でいて君を好きでいたいな」

なんて甘く囁くと、

「現実逃避も大概にしろ」とため息をつかれた。

今日から中間テスト。

### <生まれ変わる>

絶望している君に「生きろ」と言っても、この世の地獄を長引かせるだけに思うだろう。

この生の終焉と生まれ変わりに期待して一歩足を踏み出そうとする君に、かつて絶望を経験した私に友がくれた大切な言葉を贈ろう。

「人は死なずとも生まれ変わることができる」

諦めなければ。

<さよならは嫌い>

昔からさよならが嫌いだった。

物に対しても人に対しても。

部屋の中はゴミとも宝物ともいえるお気に入りであふれ、人とは離れると寂しいしくつつきすぎると別れが寂しすぎるので微妙な距離感を保つことにしていた。

さよならは嫌い。

私には手放せない好きな物がありすぎるのよ。

<ありがとう>

「いつもありがとう」って言えなくてごめん。

今更そんなこと言ったら変に思われちゃうかな。

それはやだなって思ったの。

それに感謝の気持ちは伝わってると思ってたから。

でも違ったね。

言葉は届いてこそ。

今更だけど、言うね。

届くといいな。

「いつもありがとう」

今日は父の日。

<輝くはず>

未来は小さな今の集まりだ。

だから今をピカピカにしよう。そしたら未来は輝くはず。

でもやってると結構大変で、失敗して悲しくて理不尽に怒ってやっと輝いたと思っても一瞬でくすむ。

途方に暮れてくすんだ今を抱きしめてよしよしって撫でたらまた輝き始めた。

明日はもっと輝くはず。

<一緒にごはん>

「おいしいご飯をおいしいって食べたいね」

風邪っぴきの僕にそんなことを言うのは、早く元気になれってことだよな。

熱でエフェクトかかった君は心配そうに僕を見下ろしている。

ちょっと泣きそうな顔。

ああ、ごめんね。

君も美味しいご飯を食べられてないんだね。

元気が一番だよ。

### <小さな花びら>

雨上がりのピカピカの空に真新しいランドセルをカタカタ鳴らしながら黄色い帽子の娘が学校に向かう。

桜の花びらが空から降ってくるのを両手でとらえようとはしゃぐ娘を追いかける。

小さな両手につかまった花びらを「お母さんほら」と見せてくれた。

瑞々しい柔らかさに頬がゆるむ。

### <ふきのとう>

母が送ってくれた野菜の中にふきのとうが入っていた。

たぶん田んぼの畦に土手に生えていたのだろう、かわいらしいのが6つ。

茹でて酢味噌和えにしようと思ったのに失敗してとろけて粉々になってしまった。

それでも箸先の緑色のほろ苦い味は田舎に春が来たことを知らせてくれた。

### <ざっくり>

心の柔らかいところがざっくりと傷をした。

とても痛かった。

でも「お腹空いてるときにチョコもらった」とか「電車に間に合った」とか「可愛い物を買った」とか「ごはんが美味しかった」とか。

そんな小さな「いいこと」の絆創膏が傷を覆ってくれた。

まだ痛いけどやっと少し笑えた。

### <憧れ>

届かない物に手を伸ばし続ける。

夜空に浮かぶ星も昼間の太陽も青空を飛び去る鳥もつかんだことはないが、つま先立ち背すじを伸ばし腕を指先を遠く遠くへ伸ばしていく。

「疲れないか」とたまに聞かれるが、欲しいんだ。

例えそれが届かないとわかっていても。

憧れとはそういう物だ。

<明日>

明後日は月曜日。

明日は明るい日と書くよな。その後はどんな日だろうか。

前日の明るい日よりもっと明るいのか、それとも夕方のように穏やかで少し寂しいかんじなのか。

ああどうしよう。

明日は先日告白した彼と初めてのデート。

明後日月曜日が明るい日かそうでないかは明日次第。

<役に立たずの魔法使い>

厳しい修行を積んで最高の雷と闇魔法を取得しても日常では役に立たない。

僕は今日も小さな少女の使い魔に罵られていた。

「蠟燭の火くらい自分で灯してください」

「だって炎魔法苦手」

「じゃあマッチ買うために働いてきて！仮にもこの国最高の魔法使いでしょ？」

「面倒」

「バカ！」

「でもね。僕、へたに炎をつけようとする、絶対消えない闇の炎を灯しちゃったりするでしょ？そしたら周りの温度を奪って寒いと思うよ？もうこの部屋に住めなくなるよ？」

「だったら普通の炎魔法を習えばいいでしょ？」

「だから炎妖精の君を使い魔に」

「私はマッチじゃない！」

<悲しき満月の夜>

15になって初めての満月の夜。

私は初めて人から血をもらう。

緊張する私にお父様は「大丈夫」と微笑む。

連れてこられた生け贄はクラスメイトで陸上部の奴だった。

ふるえる指で触れた首筋の温度と湿っぽさと汗臭さに正直引いた。

今ほど自分が吸血鬼という事実を呪ったことはない。

<醜さ>

あるところに娘がいた。

娘は賢いが容姿が醜かったので、周りの人たちは誰も娘の賢さを認めようとしなかった。

ある日娘は男に出会った。男は

「なんて美しい人だ」

と跪き娘の手を取った。

「美しくなどないわ」

「いえ。あなたの魂は極上だ」

<戦いは続くのだ>

敵の呪術師は王女の精神攻撃で錯乱しながらも最期の呪文唱え、呪いを王女の胸に突き刺した。

倒れた王女に走り寄った戦士達は胸に刺さるものを見て絶句した。

この国の調整を司る王女の均衡を崩す呪いの矢。

目を開けた時最初に見た者と恋に落ちると言う…。

戦士達の戦いは続く。

<お祭りのお菓子>

お祭りの日に王様が特別に下さるお菓子は私だけ小さな箱だった。

他の子は大きな袋だったのに。

大人は生まれや見た目で差別する。

哀しいと思っても文句が言えるような立場ではないから口をとがらせて帰る。

病床の母は小さな箱を押し頂いて大事に食べなさいと笑うので私は影で泣く。

翌年のお祭りの日。

やはり小さな箱を持つ私に他の子達がお前はいいなと言う。

中はいつも通りの砂糖菓子。

他の子達がもらっていたのは出店の煎餅だった。

明らかに私の方が高価な菓子だ。

何故だろうと帰って母に聞くと母は遠い日々を懐かしむ目で

「王様のお気遣いですよ」

と笑った。

<空の目>

『夜空にあるたくさんの目』

という一説を本で読んでから、星に見つめられているような気がしてならない。

仕事帰りに夜空を見上げれば、大きい小さい目。

地上にいる僕を見つめて何を思うのだろう。

<入道雲のソフトクリーム>

夏の空にまっ白な入道雲がによきによきとのびていく。

それに舌を這わせてねろんとねぶったら、ほんのりあまくてしゅわっととけて、なんだかぴりぴりするんだよ。

おいしいからもう一度ねろんとねぶると今度はじゅわっとした。

ああ雨が降るんだね。

あの子は傘を持っているかしら。

<さらばさらば>

遅い春。それは変わらず咲いた。

薄墨の山にぽっかりと薄紅の雲が浮かぶ様を次の年も見られると思っていたが、山間の小学校は今年で廃校となり校舎は取り壊された。

私も逝くだろう。

さらばさらばと手を振る。

更地となった学校に残された二宮金次郎像は山の中腹を見上げ手を振る。

<春だよ>

「春だよ」とリスが言いましたが、くまはまだ冬眠から起きようとしません。リスは耳元でまた「春だよ」と告げるとくまは目を覚ましました。でも外は雪。「春はどこに?」「ここだよ」誇らしげに見せるリスの手には福寿草の花びら。「ああ春だね」小さな春にくまは微笑みました。

。

<校庭のクスノキ>

言葉を持っていれば小さかった君たちがどんなに早く大きくなったかを、その姿を眺めることがすごく楽しみだったと伝えられるのに残念だ。

だから私なりの伝え方で君たちに伝えよう。

風鳴りに合わせて枝を揺すって歌おう。

校庭の隅から君たちに、もっと大きくなれよ。ガンバレよって。

### <はははの日>

僕が真剣に悩んでいることをお母さんに話したら、お母さんは

「はっはっは！」

と大爆笑。

ひどいと怒ったら

「今日のはははの日だからいっぱい笑う日なんだよ」

と言う。

何てバカな母ちゃんと思ってたら脇を両手でちょちょよされて僕も

「はっはっは！」

と笑った。

なんかすっきり。

### <うさぎの道>

昨日から降り続いた雪がやみました。

うさぎはふんふんと鼻を鳴らして巣穴から出てみました。

外は一面まっ白。

キラキラと雪が輝いています。

うさぎは雪に足を取られなが進みます。

振り返れば自分が通ったところだけ道になりました。

それがなんだか楽しくてもっと駆けて遊びました。



<暑い>

暑いなあって思いながら目が覚めるとエアコンがうなりを上げていた。  
慌てて起きてリモコンを操作するけどエアコンは止まらない。  
やっぱ故障か。  
仕方なくコンセントを抜いて止めた途端、鎖骨に汗が流れた。  
ああ夏は遠くなったなと外を見る。  
結露する窓の向こう、雪はまだ止まない。

<すってんころりん>

突然の雪で滑りやすくなった玄関を慎重に歩いていくと同僚の女の子が目の前を盛大に転んだ。

こんな日にヒールのあるやつあぶねえだろ。

「大丈夫か？」

「すみません」

戸惑う笑顔でまた転ぶ。

生まれたての子鹿かよと苦笑しつつ手を貸した。

残業終わって外に出たら薄く雪化粧していた。

普通の道はいいけど会社前のタイルはつるつる。

ヒールだから慎重に歩いたのに転んだ。

今助けてくれた人がいたら私惚れる。ホントに惚れちゃう！

「大丈夫か？」

って手を差し伸べる大嫌いなこいつ以外なら誰でも！

<渴き>

朝、ベッドからゆるりと起き上がりラジオを付けた。

電波塔から届くラジオの音は今日もご機嫌な声で世界が乾いていく様子を話す。

ぺたぺた裸足で冷蔵庫を開け冷たい牛乳を一口飲むと夢見る体が覚醒した。

渴いた喉を潤す一口が世界にも与えられるべきだと思いつつ冷蔵庫を閉めた。

### <ぬいぐるみ>

持ち帰った仕事がようやく終わった。  
先に眠っている妻を起こさないようにそっとベッドに入る。  
妻の背中越しに手を回そうとしたら何かもふっと手に触った。  
見れば大きなうさぎのぬいぐるみ。いつの間に買ったんだ？  
妻の背中を抱く。腹はぬくいが布団から背中が出て寒い。

### <シンデレラ的な>

転校生が彼の国の王子様ってすごいよなって話してたら彼から近づいてきた。  
すごい美貌の王子様。破壊力はハンパない。  
見惚れていたら王子様が私の前で止まった。  
え？まさかシンデレラ的なアレですか？  
ってめっちゃ期待したら何か拾った。  
「落ちましたよ」  
彼の手に私の残念な答案があった。

### <呟くな！>

月が地面の惨劇を照らす。君は、  
「貴方のことは、許せない」  
と言うので、困ってしまった。  
『ぶつかって落ちたソフトクリームが足下で広がって気まずいです。この場合どうしたらいい  
でしょうか』  
と携帯で呟いたら後ろ頭にすごい衝撃。  
教科書入りのバックで殴るのはやめて。

### <たぶたぶ>

二の腕にたぶたぶしたのがついてきたと苦笑していたら後輩に笑われた。  
若いっただけで財産なんだよって入りたての頃の先輩の言葉が頭をよぎる。  
今の自分はその人の体型に近くなり、情けなくも笑えて後輩に

「若いだけで財産だよ。今の自分を大事にしなよ」  
と言うしかなかった。

#### <猫になりたい>

日だまりで猫がまどろんでいる。  
あくびして顔をこすってまた眠る。  
気持ちがいいんだろうなあ。嫉妬されてるなんて思わないよなあ。  
教室の中はあの日だまりより温かいけど羨ましい。  
このテストからあそこに逃げるには……と考えたけど無理だなと鉛筆を滑らせた。

#### <ガリガリ>

ジュースの底に残った氷をがりがりかじっていると横にいた女子に睨まれた。  
なんで？ただ氷かじってただけで何もしてないのになら  
「あげる」  
ってクッキーをくれた。  
何これ俺に好意でも？と思ってよく見たら鉄分配合。  
「私も貧血なの」  
無邪気に微笑まれ曖昧に頷くしかなかった。

#### <幼き頃の嘘>

幼い頃につかれた嘘が今になって浮上した。  
嘘を信じることで俺は深く傷つき苦しんでいるというのに、隣で嘘の元凶の友人がカラカラ笑っている。  
メロンパンにはメロンの果汁すら入っていないという事実が俺の手元で主張する。  
興味がなかったとは言え常識がないと思われるのは辛い。  
  
今時メロンパンを食べたことがない幼なじみにメロンパンを奢ってやったらメロンが入ってないと駄々をこねられた。  
「普通そうだよ？」

と笑えば彼は恥ずかしげに顔を赤くした。

勉強大好きで学年主席なのにたまに抜けているところが誰よりも可愛いけど、武士の情けで言わないであげよう。

### <腹立つわ>

あいつと目線が合う。

小学校の時は私よりもちっちゃくて泣き虫でアホでどうしようもなかったのに、冬になったらクラスで一番背が高い私を追い越しそうに背が高くなった。

見下ろしていた奴から見下ろされるんやろか。

なんかイヤやったから蹴ったたらにこっと笑われた。

腹立つ！

### <卒業>

二階の窓から「おめでとうございます！」という声と共に紙吹雪が降ってくる。

すごい量で地面が既に白い。

可愛い後輩共から卒業する俺らへのはなむけだ。

「後始末がなげなよ！」

手を振って笑った。

桜吹雪の頃には俺は先生になる。

お前らみたいな奴らを増やせるようにがんばるよ。

### <自由>

一つに結んでいた髪をほどいた。

すごい開放感。自由っていい。

学校は髪を結んで行く校則があるけど生徒の自由を尊重して欲しいなってお母さんに言ったら

「自由って大変よ？」

と言う。

その時は不服だったけど大人になって美しく保つことがいかに大変か思い知り、母の言葉を苦々しく思い出した。

### <聖女?>

そこだけ時間がとまっていた。

清廉潔白なシャツを纏い冷静な瞳で手元の本に描かれた鳥を見ている彼女。

横顔はまるで聖女のように僕のような者が触れれば汚れてしまうのではないかと思うほどだ。

色欲は彼女に似合わない。

だから鳥の本の横に積まれた薄い本は見なかったことに。

### <流行>

「流行ってのはさ。創造されて華々しく広まってみんなが楽しむけど、すぐ新しいのに消されて寂しく散っていく。まるで夜空に咲き誇る花火だ」

旧友の絵描きも歌うたいも世の儚さを嘆くので

「私は好きよ。それに流行は戻るものだよ」

精一杯の笑顔を一緒に酒を送る。

「花火に乾杯」

### <ベーベちゃん>

待ち合わせ中にふわりとかすめる甘いバニラの香り。

近くにいた奴の煙草だ。

暫くしてそれは線を描いて地面に落ちた。

落とす奴はしらぬふり。

私は目の前でそれを踏んで消して目の前にかざすと微笑んでやった。

「甘いもの好きで後始末出来ないベーベちゃんはお家に帰りなさい」

### <節電>

家族ぐるみで取り組んだ節電は、暑い夏を我慢するだけだったようだ。

母は電気料金を記した紙を震える手で握りしめ盛大なため息をつく。

これが自分達の実力なのかと落胆した様子だ。

言えない。

暑さに負けた父が夜中、冷蔵庫を開け放して涼を取っていたと、口が裂けても言えない。



## その他のお話

---

### <影を踏む>

車のライトを背にした長い影の主は憎い義父だ。  
私は眩しさに目を細めつつ彼の元へ歩く。  
女子寮は夏の休暇の間閉鎖されるから、私は義父の元で過ごさねばならない。  
その間、私は彼の言うことをなんでも聞かなくてはならない。  
どんなことでもだ。  
だから今だけ憎しみ込め、影を踏む。

### <あじさい>

雨が降る。  
花散らしの雨だ。  
水たまりの中はぎっしりと花だった物が浮かんでいる。  
上から降ってくる花びらは透明なビニール傘をおしゃれな花模様に変えていく。  
見上げれば既に緑の小さな葉が真夏に向けてスタンバイしている。  
賑わしい春は終わった。  
私の一年もこれからだ。

### <雷怖い>

机の下の小さな闇の中に彼女はいた。  
私は熱いミルクティを側に置いて屈んだ。  
さっきまで鳴り響いていた雷鳴は遠のき、夜空に星が一つ瞬いていたことを話すと、彼女はぱっと顔を上げた。  
涙と鼻水でぐしゃぐしゃだ。  
手を伸ばして抱擁すれば首筋に温かな吐息を感じて思わず微笑んだ。

### <浮気はスパイス>

奥様は旦那様に仕置きされ鎖に繋がれたままの私に跪き慈悲の言葉をかけキスをする。  
と、同時に旦那様が部屋のドアを開け、奥様の頬をひっぱたき私に鞭を打つ。  
浮気性の旦那様を家に留めておくため毎晩演じられる茶番に付き合わされるのはまっぴらだが、その分のボーナスは破格だ。

### <おやつ>

日曜の午後、ほたるちゃんが「おやつよ。カロリー控えめにしておいたわ」って器に入ったアイスをくれた。

さすが万能お手伝いロボット。

一口食べて「おいしい」って言ったら、

「べ、べつにマスターに喜んでもらおうなんて思っていないんだからね」

って照れた。

口の悪さもいつも通り。

### <花屋さんの母の日>

いつもお仏花を買って下さるお坊様が透明な自動ドアの向こうに見えた。

徹夜明けで朦朧と仕事をしつつ様子を伺っていると、ゆっくり入ってこられた。

「いらっしゃいませ」

今日もお仏花かな？そう思っていたら、今日はなんだかケースの中のきれいな色の花を見ている。

どなたかのお祝いかしら。それとも思っていたら、

「すみません」

と照れくさそうに鼻の頭をかきかき母の日用に小さなブーケにしておいたカーネーションを指さされた。

処理してお代をもらってお渡しすると、お坊様は大事にそうに抱えて店を出られ、外にいた奥様に渡された。

母の日は殺人的に忙しく、家にも帰れずにカーネーションのアレンジメントや花束を作って作って作りまくるんだけど、穏やかで愛しげに奥様を見るまなざしのお手伝いが出来るなら、一年に一度くらいがんばっちゃおうかな？

.....でも、今日は寝かせて。

### <元子犬の気持ち>



家出した上に雨に濡れて相当惨めな気分で家に帰ると体を豪快にわしわしと拭かれた。  
文句を言おうと思ったけど今にも泣きそうな顔で「ごめん」と繰り返し言われたから許すよ。  
君もごはんを忘れて遊んでくれなくなったことを反省してほしい。  
子犬じゃなくなった僕とも遊んでよ。

### <それぞれの世界>

現実に興味を持たない二人はそれぞれの世界の中へダイブを繰り返す。  
彼は電子空間へ。  
彼女は本の世界へ。  
それぞれの世界は優しくて気持ちが良いくて、一人だった。  
一人は寂しい。  
二人はふり向き、背中合わせの片方に手を伸ばした。

彼等は手を繋いだままそれぞれの世界へ旅立つ。

### <好きなように>

遠距離射撃は苦手だと言いながら的確に当てていく姿に惚れたのと母は笑う。  
コタツで丸まる父の背中からは想像できなくて戸惑うけど。  
元スナイパーの父と天才科学者の母は晴れ着姿の私を見て感慨深げだ。  
あなたの人生好きに生きなさい。  
私達がそうしたように。  
そうね。そうするわ。

### <味付きの夢>

味付きの夢を見られるオモチャが発売された。  
早速購入して試してみた。  
確かに味がしたのだが、口の中を切った時の血の味とか、無理矢理飲まされた泥水の味とか、  
怪物の口の中で叫んだときに入り込んだ唾液の味とか、最悪だった。  
夢を自由に見られるオプションも購入すべきだった。

<サンタ>

ひょろりとしたサンタがアパートの階段にいた。

膝の間に頭を入れた恰好で蹲っている。

傍らにはぺしゃんこになった白い袋。

配り終わって疲れて寝てしまったのかな？

「おはようございます」

声をかけると顔を上げた。

寝ぼけた顔のサンタはやつれたおじさんだった。

おじさんはばつが悪そうに頭を掻きながら

「迷っていたら眠ってしまって」

と言う。

「あの」

おじさんは私を見上げた。

「もう年齢的にアウトだって言われたけどまだ信じてくれているんだ。期待に応えるのがサンタだろ？」

その送り先はこのアパートに住む高校生の女の子だった。

「だったら渡せばいいのに」

「でもおじさんがよう……」

思わずおじさんの背中にケリを入れてしまった。

ぐずぐずしてる男っていやなのよ！

「あのね。サンタが来なかったクリスマスの朝のがっかり感ってマジないわ～ってかんじよ！さっさと渡しに行きなさい！」

おじさんは立ち上がり彼女宅のポストにぎゅうぎゅうプレゼントを突っ込んだ。

そして

「ありがとう。よいクリスマスを」って手を振って走り去った。

集積所にゴミを捨てて戻ると、プレゼントを抱いて涙ぐむ高校生女子がいた。

おじさんよかったな。よろこんでるよ。

おじさんも、よいクリスマスを。

## リア充爆発しろ！（バレンタイン2012）

---

最悪。

どろりとしたチョコレートが頭からたらりと垂れ下がってくる。

「おにいちゃん大丈夫!？」

リビングでたまたまそこに転がった消しゴムを取ろうとしたら上からボウルが降ってきて衝撃と共に頭から手作りチョコになるものが降ってきた。

手作りとはリア充めと妹の思い人を呪う。

それから何度もシャンプーぶっかけて洗ったのに、朝になっても頭がチョコレート臭い。

世の中チョコレートで溢れているとはいえ、自分の頭もチョコ臭がするなんて。

まあバレンタインなんて俺には全然関係ないけどな！

贈る側も贈られる側も羨ましくも何ともねえ！

爆発してしまえ！

教室で授業を受けてると甘ったるい匂いに先生が窓を開けろと言うしまつ。寒さに震える窓際の奴らにすまんと両手を合わせた。

休み時間、顔見知りの女子に

「なんかいいにおいする」

って髪を触られた。

「シャンプー？」

説明するのめんどいから正直に言う。

「リアルにチョコかぶった」

彼女は笑って

「かぶったんだ」

ってポケットに手を突っ込んだ。

「じゃあこれ私から」

それはチロルチョコで。

「返事は今度でいいよ」

って行ってしまった。

どういう意味？

告られたのか俺？

頭がチョコとハテナでいっぱい混乱してると、すれ違いざま

「リア充爆発しろ」

と罵られた。           end

## 歳月

---

### 1月

隣の席の君が気になって仕方がなかった。

落とした消しゴムを拾う仕草とか、電車の中で夕日を見上げる瞳とか。

試験が近いというのに歴史の教科書の下にノートを隠し漫画を書く君のことがとても気になるんだ。

これは恋だろうか。それとも君のことがただ気になるだけなのか。

### 2月

「本命」とか「義理」とかバレンタインに浮かれている奴らを尻目に単語帳を捲る。

先日の席替えで廊下側に行った君。

さっき通り過ぎるフリしてノートを盗み見たら、チョコレートの作り方をイラスト入りで書いてあった。

君も好きな奴がいるのか。なんか裏切られて気持ちだ。

### 3月

花に送られて3年生が卒業していった。

僕は部活の先輩方を見送るために部室で待機していた。

一番仲がいい奴が「好きな奴がいるんだ」なんて言うから「誰誰!？」って大騒ぎ。

3年生の先輩だっていうからみんなで応援しまくって告白させることになった。

結果は聞くな。

### 4月

3年生になって初めての登校。張り出された紙に君の名前を見つけた。

今年も同じクラスで良かったのか悪かったのか。

そう思っていたら桜吹雪の向こうから友達と話しながら来る君が見えた。

掲示板を見て自分の名前を見て友達と抱き合う。

その相手が自分だったら...馬鹿か俺。

### 5月

最高気温がぐんぐんと上がって30度になりそうな勢い。

真っ青なきれいな空に白い雲がマンガみたいに浮かんでいる。

ただひたすらに校庭を走る。  
十周なんて鬼すぎだ。  
熱中症のことが頭の隅をよぎる。  
汗が飛ぶ。  
走る。  
ふと視線を感じて校舎を見上げる。  
君が、僕を見ていた。

## 6月

雨が多いこの時期に体育祭をやるうちの学校は馬鹿だと思う。  
今日も雨で練習は中止。かわりにクラスで応援旗を作ることになった。  
君はアニメに出てくる美形妖怪で応援旗を作ろうなんて友達とはしゃいでいる。  
白い布に美形のアップが描かれた。  
...いいけど他の奴らどん引き。

## 7月

部活の帰りに花火を見に行こうなんてことになった。  
大会が近いのになんてのんきな奴らだと思いながら近くの河川敷まで歩く。  
結構な人混みの中で見慣れた顔を見つけた。  
君だった。  
年上の男の人と親しげに話す君は笑っていた。  
なんで僕はこんなに衝撃を受けてるんだ？

## 8月

最後の大会で結果を残すことなく引退。  
後輩に礼されて、もう来なくていいんだ。暑い中走らなくてもいいんだと思ったら、鼻がつんとした。  
好きだった。走るの。  
顔をしかめていたら、隣の奴につつかれた。  
「泣くの？」  
泣くかよ！  
僕らの長い影が名残惜しそうに校庭に伸びる。

9月

新学期の席替えで君が隣になった。

やっぱ3年にもなると漫画を書かないんだろうなと思っていたのに、相変わらず君は授業中にノートを二枚重ねにして何かを書いていた。

見ていたら「見るな」と睨まれた。

不覚にも可愛いと思った。思ったら顔のニヤニヤが止まらなくなった。

10月

君の頬から涙が滴る。

いつも気になっていたノートが落ちていたから拾うとき不可抗力で見た中身は、かなりうれしくてかーっと顔と体が熱くなった。

酒で酔ったらこうなるのかと思うくらい。

ノートは僕のイラストがいっぱい。

抱きしめたいくらいに嬉しいんだけどだめかな？

11月

あれから一ヶ月。君は相変わらず何かを書いているけど、もう僕じゃないだろう。

あの日、拾ったノートをひったくった君は、

「デッサンの練習してたの！勝手に書いてごめん」

って言った。なんだ便利に使われたのか。

幻を見た後みたいに気持ちが冷えてもう君を正視できない。

12月

あの時の衝撃で君への思いは白紙となったのに、また君を視線で追うようになった。

ある日の放課後、君が声をかけてきた。

「あの、書いてごめん」

差し出すノートには僕の横顔。

「やっぱ目が追っちゃうんだ」

「それは僕も」

と咄嗟に言う僕に君は赤い顔して小声で...

end

『好き』

と一言が書かれたノートの切れ端が下駄箱の上履きの中に入っていた。

どうせ悪戯だとくしゃっと畳んで上着のポケットに入れた。

その日は嫌な事があって友達に当たり散らした後、ポケットに突っ込んだ指先にその紙片が触れた。

『好き』か。

俺は自分を好きになれないよ。

ノートを切った紙片に『好き』とだけ書いて、憧れの上履きに入れた。

勢いだけの浅はかな告白をしたはずが、名前を書くことを忘れたことに気がついた。

昼休み、万引の疑いをかけられたあの人は先生に呼び出された後で友達に八つ当たりしていた

。

かける言葉は見つからなかった。

『ファイト』と書かれた紙片が上履きの中に入っていた。

誰かと間違えたのではなく俺宛？ 昨日の俺の醜態を見ていたのか？

かあっと顔が赤くなる。

恥ずかしさと苛立ちでぐしゃりと潰した紙片を無意識でポケットに入れた。

一晩考えてやっと『ファイト』と書けた。

部活の朝練の前にあの上履きに入れて、今日は元気だといいなあなんて思う。

自分の名前はやっぱり書けなかった。

私ごときが心配してるなんて、きっと困らせるだけ。

教室の隅から応援してるね。

声をかける勇気はないけど。

『ファイト』

万引き（やってねえ！）で親が呼び出された。

どんなに否定しても先生は信じてくれず。

警察もだよ。防犯カメラに写ってたのはたしかに俺だけやってないのに。

帰ってきて机の上にくしゃくしゃの『好き』と『ファイト』を並べた。

明らかに同じ筆跡。

俺が好き？ 物好きだな、お前。

絶対やってないって言ってるのに先生はひどいと思う。

ちょっと悪いところもあるけどそんなことする人じゃない。

机に突っ伏して寝たふりをしてるあの人が可哀想だ。

『元気出して』

ノートを切って、小さく畳んで教室を出ると、移動教室に行くフリして昇降口のあの人の靴の中に入れた。

もうだるいから帰るか。

荷物を持って昇降口に靴を取りに来たら、俺の靴に何か入れた女がいた。

同じクラスの……なんだっけ？

「おい」

声をかけたらものすごい顔で怯えられた。

その手にはあの紙片が握られていた。

手を掴んで無理矢理開かせたら、『元気出して』と書かれてた。

昇降口で靴に入れようとしたところを見られた。

紙も見られた。すごく怖い顔してる。

きっと迷惑だったんだ。

きっと他の誰かじゃなくて私だからダメなんだ。

頭の中ぐるぐるして泣きたくなって困ってたら、「サンキューな」と、私の紙をポケットに入れてあの人は帰っていった。

帰り道、三枚目の紙はかさりとポケットで音を立てた。

教室の隅で自信なさそうに座ってる奴が俺が好きとか正直嬉しくないけど、元気は出た！

学校にUターンして校長の所に行った。

自分の無実を冷静に説明すると校長から「ちゃんと調べる」の一言をもらえた。

やった！



疑われてた万引き事件は犯人が見つかって、あの人は元気になった。

結局あの人は『好き』の返事はもらえなかったけど、毎日元気なあの人を見られるだけでとてもうれしい。

今度はちゃんと名前を書いて直接渡せるよう自分に自信を持てるようにがんばる！

(ラブレターの日によせて)

## お面の下

---

桜吹雪の入学式で出会った男の子は、セルロイドのお面をかぶっていた。  
立ち居振る舞いは普通なのになんでお面をかぶってるの？  
興味津々で見えていたけど私にしか見えないみたいで、友達に聞いても  
「何変なこと言ってるの」って。

日替わりで変わるお面の下はどんな顔してるんだろう。  
男の子のお面、今日は宇宙人のヒーロー、昨日は動物。  
何が多いか日替わりの統計でも取ってみようかな？と思ってたら目が合った。  
じっとこちらを見ているので、なんとなく手を振ってみた。  
すると彼はこっちに向かって歩いてきて私の手を掴むと、  
「何で俺を見てるの？」  
と問われた。

「お面」

すると彼のラッコのお面がさっと青色に変わった。

顔色が変わったってことかな？  
しばらくくするとお面の色が戻ると  
「そんなのしてない。変なヤツだな」  
男の子は私を変人扱いして去っていった。  
てかお前の方が変人だよ？そんなお面して。  
ったくなんてヤツ！ムカツクわ！

でも目が離せなくてそれからもじっと男の子、村岡君を観察してた。  
ヤツはお面さえしてなければカッコいいんだよなあ。  
何をするにもソツがない。  
完璧なんだよ。  
成績は常に上位でスポーツできてみんなに優しく先生の人望厚く、今日は目がキラキラした  
お姫様のお面が笑っていた。

そんなとき、同じクラスの坂下君の財布がなくなった。  
クラスの中に泥棒がいると大騒ぎになり、その財布が村岡君の鞆から見つかった。  
なんていうベタな展開だ。  
坂下君は村岡君のことをやっかんでたから悪戯したってみんなわかっているのに、村岡君は動揺  
してお面の色を変えていた。

いつもならべったり貼り付いているお面と顔の間に隙間が出来ているのに気がついた。その下はなんかすごくカッコいい顔が悔しそうに歪んでいるのが見えた。

こんな顔してたんだ。

村岡君は坂下君の前に財布を置くと一礼して荷物をまとめ、みんなが唖然とする教室を横切り出て行った。

私は思わず立ち上がり「ちょっとトイレ」と断って教室を出ると村岡君を探した。

彼は図書室のすみっこでぼんやりと外を見ていた。

そっと近寄って

「大丈夫？」

って声をかけたら

「どうして追いかけてきたの？」

と言いながらお面を外した。

「今度こそ失敗しないと思ったのに」

ハーフなのかな？

彼は青い眼の王子様だった。

造形がいい顔ってお面よりインパクトある。

「こんな顔だからさ、中学でも今日みたいな事あったんだ」

だからお面してたの？

「別にみんな村岡君がやったって思っていないよ」

「そうかな？」

「そうだよ。気にしない気にしない」

そう笑って肩をばんばんと叩くと、眩しい顔で彼は微笑んだ。

「よかった」

その笑顔の一撃はすごかった。

あれから村岡君のお面は見えなくなった。

お面の時より目が離せないのは恋じゃないと思いたい。

☆おしまい☆

<除夜の鐘>

満点の星空の下白い息を弾ませる。  
耳には遠くの除夜の鐘。  
家から少し離れた公衆電話で指が覚えた番号を押す。  
今年の最後と来年の最初を君と迎えるために。

<元気で>

くるぶしまで積もった雪を踏みしめ二人無言で歩く。  
彼の正月休みが終わるから駅まで送りに行く途中。  
「元気で」と言えばいい？  
「曇天でも風花が舞って綺麗だね」か？  
でも結局  
「好き」  
としか言えなかった。  
白い息と一緒に  
「俺も」  
と彼が泣きそうに笑う。  
今年の目標は脱遠距離！

<マフラー>

背骨の一個一個が冷えていく感じがしてぶるりと震えた。  
やっぱ朝は冷えるなあと思っていたら、いきなり突風が僕のマフラーを掠って凍った地面に落とす。折角ぬくかったのに。  
冷たくなってしまったそれを嘆息しながら拾うと「おはよう」の声。  
君の声はマフラーより暖かい。

<課長……>

つまさきはとても冷たいのに暖房が頭の上をかすめるように風が吹いてるせいでのぼせる。  
ちょっと休憩したくて席を立つとふわっと体が傾いだ。  
机に手を突こうと思う前に後ろから抱き留められた。

「大丈夫？」

課長の低い声。

あの時の声を思い出して余計のぼせちゃう。

頬が熱い。

<ああ君だ>

君はおびえる瞳で僕を見つめる掴んだ右手が震えている。

ふわふわの髪。小さな背。

ああ君だ。

掠われてから今日まで諦めることなく探し続けてきた君だ。

喉の奥が苦しい。鼻の奥がツンとして涙が出そうだ。

記憶を消されても今は別の人が好きでも

「君を好きでいて、よかった」（速水シリーズ）

<普通が幸せ>

まっ赤な梅干しを食べて酸っぱい顔をしながらご飯をかきこむに妻に苦笑しながらお味噌汁をすする。

今日は普通の日。会社に行って普通に仕事をして帰ってきて妻が作ったご飯を食べて風呂に入って眠る。

「普通の日はつまらない」

とぼやくと

「普通で一緒にいられて幸せ」

と、妻が笑う。

<鉄>

「卒業式は桜吹雪で3年生を送りたい」

と鉄を動かしていた先輩は出来たばかりの桜の紋切りを開いた。

それを大きな紙に貼って部室中に張り巡らせるという。

僕も手伝って鉄を動かす。

静かな部屋に鉄と紙の音だけ。

真剣な横顔にドキドキする心臓の音が、先輩に聞こえてないといいな。

### <傷口>

ゆっくりと胸元までシャツをあげていく。

彼の目線が醜く引きつれた傷口に突き刺さる。

しばらくの沈黙の後、

「それで？」

冷静な彼の言葉に絶句した。

「嫌でしょ？こんな傷がある女抱くの」

彼は悩む私を抱きしめ頬に口づけながら耳元で囁いた。

「それも含めてお前だ。愛してる」

### <恋の始め>

「恋って突然始まる物？」って声と女子共の「きゃ～」って騒ぐ声がうるせえ。

真ん中にいるのは唯一の女友達で少々複雑ではある。

恋ってのはそんなに簡単に降ってくるもんじゃねえだろ？ぶああかって心の中で悪口言いながらそっちを見たら、あいつの熱っぽい目がこっちを見てた。

### <トースト>

アツアツのトーストに歯を立てたらさくっと音がした。

濃厚なイチゴジャムの甘さとじんわりとパンに染みたバターの香りが口の中いっぱいになったところで「おはよ～」と寝ぼけ声。

まだベッドの中から出られない彼にトースト味のキスをすると彼は「うまい」と私の唇を舌で舐めて笑う。

### <暴君>

ぽろぽろと胸元に欠片を落としながらクッキーを鷲掴みにしてほおぼる暴君な彼女。

「おいしい？」

「まあまあ」

なんだと？手作りだぞ？って言おう物ならパンチが飛んでくるから言わないけど。

食べ終わって

「次はケーキがいいな。できる？」

おねだりする上目遣いが可愛いから許す。

<四年>

私の誕生日は2月29日。

四年に一度しか誕生日が来ないからプレゼント少ないんだよね。

四年前にそんなことを愚痴ったなあと思っている私の指に銀のリングをはめながら彼は笑った

。

「誕生日にプロポーズというのが夢だったんだ」

四年待ったよと笑う彼に、私はキスで答えた。

<手紙>

また手紙を書いた。

本当はメールの方が早いんだけど紙の方が気持ちが残ると思ったんだ。

手紙の中身は日常の話といつもの言葉。

「好きだよ」

ポストに入れた手紙は隣町にいる君にすぐ届くだろう。

返事は学校で渡して。

.....それを十年経って妻に見せられた破壊力はすざまじかった。

<名無しのチョコ>

一ヶ月前にもらったチョコの箱は開封されずに机の上にある。

賞味期限がまだ先だからいいと思うし、今更開けるのも気が引ける。

あの時

「名なしの贈り物は不気味だ」

とあいつが捨てようとしてたのを俺がもらったんだ。

今日はホワイトデー。これ贈った子は泣くんだろうな。

ごめんな。

<東京の桜>

「都内は満開だったよ」



と久しぶりに帰省した彼と見上げる桜。  
ここはまだ咲いていない。  
夢や期待を存分に膨らませているつぼみたち。  
早々に夢を叶えた君は遅い春をどう思うだろう。  
3年かかって合格した大学は彼の家の近く。  
彼に会うのだけを楽しみに膨らませた夢は来週花開く。

<もふもふ>

帰り道、なんかモジモジした奴にモフっとしたかたまりを手渡された。  
同じクラスの女子だよな？ 学校の外じゃワカンネエ。  
「なにこれ」  
と言ったら、  
「よ、予選がんばってね」  
そいつは行ってしまった。  
手の平の中のかたまりは俺のユニフォームに似てた。

家に帰るとそれを姉に見つけられ、取り上げられた。  
「これ羊毛フェルトってやつ？作ってくれるような子いるんだあ」  
そして彼女は両手の中に納めると、  
「あんたが怪我しないようにって願いがこもってるかもだね。私もやっておこっかな？」  
と願掛けみたいなことして返してくれた。

「姉さんはこういうのくれないの？」  
と聞けば、  
「さっき願いを込めといた」  
と笑う。  
「姉さんから欲しい」  
キスを強請るように彼女の耳に手を添えれば  
「本気のバカは相手にしないことにしてるの」  
するりと俺の手から逃れる。  
彼女が本当の姉ならこんな感情は生まれなかったのかな。

サッカー強豪校のレギュラーが弟になると聞いたのは父が再婚する直前だった。  
年頃の男子と暮らすなんてとんでもないと思ったが、会ってみればすごい格好良くて可愛らしかった。

その瞳がだんだん熱を帯びてくるのに気がついても、知らないふりをしていようと心に決めた

。

弟が羊毛フェルトで作られたユニフォームのマスコットを持っていた。

きっとファンの子ね。不器用な子なんだろうな。

不格好な本気の手作りの品が弟の手の中で転がされている。

今彼の頭の中は夏の大会のことでいっぱい女の子のことなんて考えているヒマはないのよ。

可哀想に。

弟の手から取り上げて、その本気の上書きを試みる。

怪我をしませんように。活躍できますように。

そしたら弟がこういうのがほしいと言う。

あげないと言えば私の頬に手を添えてキスを強請る。

胸が痛い。

バカね。相手にしないわよ。

折角手に入れた互いの親の幸せを壊せないでしょ？

<金環日食>

天体ショーは終わってしまった。

一緒に空を見上げていた君は興奮した顔で

「すごかったね」

と笑う。

その笑顔の方がすごく素敵に見えるよ。

その時友達から「プロポーズ成功した！」ってメールが入った。

良かったな。

俺は「彼女と空の指輪を見ただけで満足」って返信。

今は、な。

<夢で会う>

思いきって彼の腕に飛び込んだ。

少しかすれる低い声、背にまわされた手の温み、本当に好き。

大好き。

現実にはいない人に、私は恋をした。

夢だとわかっていたのに気持ちごととまらなかった。

目覚めると全て忘れるだろうけど。また会えるかな？

会えたらこの恋を一からやり直したい。

もう夢なんか見ないと君が泣く。

僕のことをすごく好きで好きでたまらないのに朝になったら忘れてしまうからと。

いいよ忘れても。

だって君は本当の僕を知ってるんだ。

目が覚めたら学校に行って教室の斜め後ろを見てよ。

もう君の夢に忍び込むのはやめるよ。

だから現実の僕を見て。

<恋とは花火のようなもの>

ロケット花火のようなはじける恋だった。

別れが切ない線香花火のような恋だった。

しだれ柳のようにいつまでも後を引く恋だった。

君といたくてナイアガラのように手を伸ばしたけど打ち上げ花火みたいに玉砕。

明日は君の結婚式。

ラストのスターマインのように華々しく君は旅立つ。

### <ばんそうこう>

「胸の空は真っ青で、たまに小鳥が飛んで蝶々や蜻蛉が遊ぶのよ。でも」

見せてくれた彼女の胸にはぽっかりと黒い穴が開いていた。

「悲しいと穴があいて、そこに小鳥も蝶々も吸い込まれてしまうのよ」と泣いた。

僕は彼女の頬にキスして、穴にぺたんとはートマークの絆創膏を貼った。

### <桜のせい>

彼の後ろに見える桜がざわめく。

恋心は桜に左右されるのかもしれない。

入学してすぐに彼を見つけて一目惚れしたのもこの学校隣の桜のトンネルの下だった。

花びらがこぼれる下で友人と屈託ない会話をする彼がめっちゃ素敵で、思わず「好きです」と叫んだのも桜のせいにちがいない。

### <友チョコ>

女子に押しつけられたチョコを前に困っていたら「チョコあげる」って君が男子共の手の平に小さいチョコをおいていく。

僕も手を出したら「もらってるでしょ？」って言ってくれない。

どんなチョコより君のチョコが欲しいのにな。

おしげなく愛をばらまく君の本命は誰なんだろうね。

### <雨の日>

「雨の日はなんか嫌なんだ」って俺がしょげると彼女が笑った。

「私、お日様好きだし青い空好きだしふっくらした白い雲も好きだよ。

でもね。雨の日は一緒にいられて嬉しいんだよ。それに」  
そして彼女は俺に抱きつく。  
「しょげてる君を慰めることが出来るからね」

### <眠れない>

明日がよりよい日になるように、ゆっくり眠るということをしようと思う。  
枕の下にお気に入りの風景写真を入れアロマの香りを部屋に満たしてふかふかのお布団に横  
になって寝ようと思った時メールの着信音。  
気になって見て後悔。  
彼からのお誘いメールみた後なんて、とても眠れない。

### <力が欲しい>

僕にはもっと強い力が必要だ。  
海の底に突き刺さる剣を取りに行こうとする僕を必死になって止める君を振り払い海に飛び  
込む。  
暗くよどんだ底にきらりと光る剣。  
後もう少しと手を伸ばすが息が切れた。  
溺れた僕を引き上げながら君は泣く。  
ごめん。  
でも君を守るための力が欲しいんだ。

### <ワンピ>

私服姿の彼女をじっくり見てしまった。  
いつも制服姿で元気すぎだからそんな印象なかったがワンピ姿も結構いいな。  
なんて思ってたなら不機嫌そうに彼女がふくれた。  
「似合わないなら脱ごうか？」  
って無神経に街中で脱いでワンピ渡すなバカ！  
Tシャツスパッツ姿も可愛いけどな！

### <恨み言>

櫛で髪をとかす手元を鏡越しに見つめると、彼女は鏡の向こうの彼女が私の瞳をのぞき込んだ。

「どうなさいました？」

「いいや、別に」

恋とは残酷な物だ。聖者を愚者にする。

彼女の恋人は戦場へ。送り出したのは私。

恨み言の一つも吐けばいいのに、彼女は変わりなく優しい。

### <嫉妬>

無神論者の俺には、神への祈りなんてものは呪文にしか聞こえない。

だから飯の前の祈りなんてのはあんまり好きではない。

「今日の糧は俺が稼いできたんだ。なんで神様なんぞに感謝するのだ」と文句を言いたくなる  
が言えない。

なぜなら祈る横顔がとても美しいから。嫉妬するほどに。

<傭兵プリンセス>

不安定な靴で精一杯笑顔で対応する我が姫君。

あ、今ドレスがやぶれる音が。裾を踏みましたね。

苦笑いの我が姫君。

戦場での働きは素晴らしのですが、こういう場所もドレスも苦手のように、前回の舞踏会では男装で出たくらい。

皆様、必死に笑いを堪えてくださり、感謝します。

<金銀>

それを目の前にして俺は苦笑するしかなかった。

懐かしいその憧憬とやらは幼き頃母上から聞いたあれだ。

正直者が得をする精霊の審判。その「あなたが落としたのは（略）」というやつを今更目の前でやられてもなあ……。

金も銀もいらん。

「俺が落としたのは古ぼた愛しい嫁さんだよ」

<ラジオ>

わた飴みたいな頼りないキスと、緑色の帽子の下に隠れてしまった顔は困っていてがっかりした。

私がキスしてと言ったのに困らないでよ。

「あやまったらぶつからね」

すると彼は大きく首を縦に振った。

「スキならキスしちゃえよ」

なんてラジオのいうこと聞くんじゃない。バカ。

<背伸び>

つま先立ちで上の方の本を取ろうと手を伸ばす。

こうしていれば近くにいる先輩が手伝ってくれるかもしれないから。

すると周りから「大丈夫？」「台を持ってこようか？」等、次々に声を掛けられ、結局自らの

手で本を取る事が出来た。

微かな勝利と共に、芽生えそこなった恋を悼む。

<キスってどんな味？>

キスをしたと思ったが、狭くて汚い俺の部屋に対象物はなかった。

仕方なくぬいぐるみにキスしてみたが、唇がもそっとしただけ。

ゲームの中の彼女がキスをねだる。

画面は固くて冷たくて何より目を閉じても眩しかった。

本当のキスってどんな味だろうな。

「キスってどんな感じなのかな？」

部活の先輩が言った。

「んー、わからん」

「じゃあしよう」

わけのわからぬうちにキスをする事になってしまった。

初めてのキスはレモンの味とか言うからなるべく期待に添えるようにレモン味の飴なめてからキスした。

唇をはなした彼女は何故か顔をこわばらせてうつむいてしまった。

なんでだろうと思ったら

「なんか肉っぽい」って。

確かに唇は肉だが。

キスとか。

二次元の住人にするのは無理だけど、先輩とできるからつい重ねてしまう。

目を閉じて頭の中で二次嫁の顔を構築して唇の感触を味わって、ああ幸せ。

唇を放して目を開けるとうっとりとした顔。

先輩は俺と何を重ねてるの？

後輩とキスって変だと思うけど、好奇心からまあいいやって今日もしてしまった。

あいつってキスの時すごく可愛い顔するから思わず目を開けてして観察してしまう。

あ、まつげ長い。

二次嫁のこと考えてもいいからたまにはこっち見ろ！

と思ったら目が合って照れてしまった。



### <夜を泳ぐ>

夜を泳ぐ。

ネオンの森や闇に立ち並ぶ電柱をよけながら。

たまに車がうなりを上げながらピカピカのライトをふりまいてむかってくるのをひらりとかわして道路の真ん中を泳ぐ。

ああお酒って気持ちがいいもんだなあって思ってたらずをつかまれて引っ張られ「危ないよ」と彼の腕の中。

### <人質>

楽観的とよく言われる。

でも辛いことがあっても嘆くだけよりましだと思う。

コンビニで強盗にあっても一緒に人質になった人に大丈夫だよって言い続けた。

「きっと大丈夫。辛いときこそ笑うものだよ。それが現実には差す光になるから」

と言ってたら嗚咽が聞こえた。

強盗が泣いていた。

ものごつつ吹っ切れた笑顔の青年が花束を掲げ

「愛してます。結婚してください」

と私の前で膝を折った。

固まったままの青年は私の答えを待っている。

「悪い。知り合いだよな？」

と聞いたら泣きながら帰って行った。

その背中で思い出した。

一年前コンビニで泣いてた強盗だった。

### <また来年>

住所を確認するため今年の年賀状を見直していた。

ドラゴンが葉書いっぱい描かれている彼女の年賀状を見つけてニヤニヤ。

さて。

白紙の葉書に蛇を書く。

「今年もよろしく」と書いてから「も」を「からずっと」と書き直す。

来年の年賀状を書く頃、彼女の名字は俺のと一緒にになる。

<行く年来る年>

コタツで紅白見て携帯電話がふるえないかじっと待っている。

絶対に一番最初におめでとうって言いたいんだけど今彼女バイトだから待ってるしかないんだ

。

紅白終わりそう。もう少しでほたるのひかり。

早く電話鳴れ。メールでもいい。

今年の最後に君の言葉が聞きたいんだ。

ゆく年くる年が始まった。

忙しいんだなあ。

仕方ないから

「今年はありがとう。よいお年を」

とメールを打つ。

送信ボタンを押したとたんに電話が着信。

「もしもし」

テレビでカウントダウンが始まる。

〇と一緒に

「あけましておめでとう！」

今年初めて聞いたのが君の言葉でうれしいよ。